11 月 7 日のメッセージ

聖書：創世記　15：　1 – 18a

「主を信じた」

聖書にはにわかに信じがたいことがたくさん描かれています。だから神の言葉もその同列だと考えて、にわかに信じがたいと思う人もいます。自分の常識の中だけで生きている人間が多い以上、仕方ないことだと言えるでしょう。

「信仰の父」と呼ばれるアブラムでもそのような人々と大きく違いはありません。アブラムは 75 歳を超えてから神の言葉に従い、故郷を離れました(「アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。」創世記 12:4)。老い先短いかもしれないけれど、神の言葉に従ったのです。しかし、高齢の彼に子孫が与えられるとの約束は、アブラム自身も信じがたいものでした。

神への疑いを口にするのは、人間としてある意味当然の姿と言えます(「アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。』」創世記 15:2)。信じるに足る証拠がほしくて、しるしを見せてほしいと願います。

しかし、神はまだここではしるしを見せられはしません。天の星を見せて、「あなたの子孫はこの星のようになる」とただ約束されるだけです。アブラムは主を信じました。しるしではなく約束を信じました。

これが神の前に正しい姿だと聖書は教えています(「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」創世記 15:6)。常に神にのみ顔を向け(「主を、主の御力を尋ね求め／常に御顔を求めよ。」詩編 105:4)、ただ神を信じることが大切です。もちろん、その姿勢が大切ですが、鵜呑みにしろというわけではありません。

例えば、復活はにわかに信じがたいことです。だから尋ねます(「復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。」マルコによる福音書 12:18)。わからないことを解決しようとして一歩を踏み出すのはまだ良いのですが、自分の理解の範疇に収めようとしたり、わかってもいないことをさもわかっているかのように振る舞うのが問題です。それは、神の力も聖書の言葉もわかっていないのも同じです(「イエスは言われた。『あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。』」マルコによる福音書 12:24)。

神の言葉に聞き、その約束を信じる者は、神の言葉に応えて行動を起こしていくでしょう(「アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたことが、これで分かるでしょう。」ヤコブの手紙 2:22)。アブラムの姿に、信仰者の一つの形を見ています。私たちの先達たちの背中もまた同じです。

そして、神の約束は確実です。神は必ず実現されます。ならば、人間はどのように応えていくのかが問われているのです。